
銀河英雄伝説～ラインハルトに負けませんシリーズの外伝や各種設定

三田弾正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けませんシリーズの外伝や各種

設定

【コード】

N4827Y

【あらすじ】

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

銀河英雄伝説～門閥貴族・・・だが貧乏！

において使用するかもしれないタイトルや

設定人物などを追々追加する予定です。

又外伝等も掲載します。

旗艦艦名録（前書き）

設定資料等を追々追加予定です。

旗艦艦名録

作中艦名

原作艦名

ヴェルザンデイ (Ver? andi) - 運命の三女神の次女で現在を司る・パーソイバル (Parsival)

皇帝御召艦

ヴェル

ザンデイ 級一番艦

クリエムヒルト (Chriemhilt) - ブルグント族の姫君 -

皇太子御召艦

改ブリ

ュンヒルデ級二番艦

アマテラス (amaterasu) - 日本の主神、太陽神 -

皇女御召艦

ブリュ

ンヒルデ級二番艦

ラプンツェル (Rapunzel) - ノヂシャ - チシャ -

ラプン

ツェル級一番艦

480年4月竣工

レギンレイヴ級に似た船体にヘルヴォル級の艦首を繋いだような形
機関はレギンレイヴ級同等側面機関4基を左右のエンジンポットに
配備

エンジンポートは大型で船体や後部格納庫を守っている

ヘルフィヨトル級同等機関2基を船体側面に配備

主船体後部のエンジンは無くその部分がワルキユーレ格納庫として延長されている。

搭載機数80機

全長1180m

塗装は蒼色

ヴァナヘイム (Vanaheimr) - 北欧神話に登場するヴァン神族の国 -

ラフ

ンツェル級二番艦

483年竣工予定

ワルキユーレに変わり雷撃艇格納庫にしている

搭載機数40艇

全長1190m

塗装は灰色

ヴィルヘルミナ (Wilhelmina)

グレゴール・フォン・エッセンバッハ子爵

ヴィル

ヘルミナ級

ブリュンヒルデ (Brunhildr) - 勝利のルーンに通じる者 - ブリュンヒルト (Brunhilda)

ラインハルト・フォン・シーリングヴァルト男爵

ブリュ

ンヒルデ級一番艦

バルバロッサ (Barbarossa) - 赤髭 -
ジークフリード・フォン・キルヒアイス帝国騎士
ユンヒルデ級一番艦

改ブリ

ユンヒルデ級一番艦

スケグル (Sc? gul) - 戦 -
ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツツ帝国騎士
ルル級二番艦

ランドグリーズ (Rand gr?i?) - 盾を壊す者 - トリス
タン (Tristan)
オスカー・フォン・ロイエンタール帝国騎士
レイヴ級二番艦

レギンレイヴ (Regin leif) - 神々の残された者 -

ベイオ・ウルフ (Beio - wolf)

ウォルフガング・ミッターマイヤー

レギン

レイヴ級一番艦

ゲイルスケグル (Geirr sc? gul) - 槍の戦 - ケニー
ヒス・ティーゲル (K? nigs Ti ger)
フリツツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト
スケグル級一番艦

ゲイル

ヘルフィヨトル (Herfi? tur) - 軍勢の戒め - クヴ

アシル (Kvassir)

エルネスト・メックリンガー

イヨトル級一番艦

ヘルフ

アルヴィト (Alvítir)

(r̥s̥et̥i)

全知・フォルセティ (Fo

ウルリッヒ・ケスラー

アルヴ

イト級一番艦

スルーズ (?r?r?)

(irnir)

強き者・スキールニル (Sk

コルニアス・ルツ

アルヴ

イト級二番艦

フリスト (Hrist)

(Salamandor)

アウグスト・ザムエル・ワーレン

アルヴ

イト級三番艦

スケッギオルド (Sceggjold)

(Sallamandor)

轟かす者、援軍・サラマンドル
- 斧の時代・ヨーツ

カール・グスタフ・ケンプ

スケッ

ギオルド級一番艦

ラーズグリーズ (R?rgr?r?)

- 計画を壊す者・ガルガ・

ファルムル (Garaga Falmu)

ヘルムート・レンネンカンプ

スケツ

ギオルド級一番艦

ゲンドウル (Gondur/Gondul) - 魔力を持つ者

- ヴィーザル (Vissarr)

エルнст・フォン・アイゼナッハ帝国騎士

ゲンドウル級一番艦

ゲンド

ヘルヴォル (Hervor) - 軍勢の守り手 - リューベック

(L?beck)

ナイトハルト・ミュラー

ヘルヴ

オル級一番艦

7

ゲイレルル (Geirr?lul) - 槍を持つて進む者 - アー

スグリム (Ahsgrimm)

アーダルベルト・フォン・ファーレンハイト帝国騎士

ゲイレ

ルル級一番艦

イーヴァルディ (?valdi) - 大力無双の者 - フォンケル (

Vonkel)

カール・ロベルト・シュタインメツ

イーヴ

アルディ級一番艦

フレック (Hl?cc) - 武器をがちゃつかせる者 -

レギン

レギナルト・フォン・ケルトリング侯爵
レイヴ級三番艦

エルルーン（E l l u n） - ビールのルーン文字に通じる者
カールハインツ・フォン・シュタイエルマルク男爵
アルヴィト級四番艦

スクルド（S c u l d） - 運命の三女神の三女で未来を司る
エルンスト・シュムーデ

オル級二番艦
ヘルヴ

ベルヴェルク（b e r v e r k） - 祸を引きおこす者 - エイストラ
(E i s t l a)

アルフレット・グリルパルツァー
ベルク級一番艦

タングニズル（T a n n g n i z u l） - 齒ぎしりする者 - ウールヴァルーン（U 1 f r u n）

ブルーノ・フォン・クナップシュタイン帝国騎士
ベルヴ
エルク級二番艦

グルヴェイグ（G u l l v e i g） - ヴァン神族の一員の女神「黃
金の力」 - ニュルンベルク（N u r n b e r g）
カール・エドワルド・バイエルライン
エイグ級一番艦
グルヴ

グルファクシ (Gullfaxi) - 金のたてがみ - キュクレイン
(Cuchulainn)

ドロイゼン

アクシ級一番艦

グルフ

グリンブルステイ (Gullinbursti) 猪 - バレンダウン
(Baleندown)

ヴァーゲンザイル

ブルステイ級一番艦

グリン

今後両作品で使用するかも知れないタイトル（前書き）

此方へ移しました。

今後両作品で使用するかも知れないタイトル

兄の名は

皇帝からの物体X

領地を貰おう

無知との遭遇

マリファナ畑で捕まえて

ロリとの遭遇

ロイエンタールはロイエンタール？

アルレスハイムで石蹴りを

サルベージ大作戦

みたか野伏釣り戦法

ジジイの恐怖

オーベルシュタイン恐怖の正体

ヤン戦法を予習せよ

叔母の秘密

支度金50万マルク

後宮への道

エヴァはエヴァでもエヴァ違い

原野商法

掘れなければ、砕けばいい

黒猪襲来

士官学校学園祭

魔術少女リリカルらみでいあ
フォークとロボスは使いよう
任天堂大作戦

ホーランドさんいらつしゃーい
ヤンとの遭遇

アンネローゼを探せ

フレーゲルをぶつ飛ばせ

原始人と一緒
韜晦作戦準備よし

皇太子の死

甥誕生

戦艦を貰おう

お見合い大作戦
その名も大公妃
シユールストレミング大作戦

やばい文書を受け取るう

刃物女とお友達

理屈倒れで論破せよ

守つて守護ギュンター

宮崎のどか作戦

遠足はイゼルローン

イゼルローンの嵐

キルヒアイスアタック

勇者達の帰還

芸術家をゲットせよ
エル・ファシル真の英雄
新婚さんいらっしゃーい

引越はロー・エングラム
シェーンコップ男爵
新造空母プロメティウス

提督達の休日
密輸でボロ儲け
競馬場の決戦

原始人と遊ぼう
トリューニヒトで遊ぼう
偽スパイを作成せよ

イゼルローン要塞特殊作戦室
自由惑星同盟大混乱作戦
疑心暗鬼を植え付けよう

ゴキブリ野郎ペイをおちょくろう
カストロプ動乱で昇進だ
赤金暗号丸判り

取りあえず此で追々追加していきます。

帝国版です

テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム　主人公471年2月3日
10歳時身長148cm　視力2.0　髪の色黒っぽい栗色　目の
色はブルー

普段からチタン合金製骨組みで布部分がケブラー纖維の扇を持
悪魔、魔王、黒真珠などなど、渾名は事欠かない腹黒皇女。

変装時は『ヴァネッサ・フォン・リヒトホーフェン』と名乗る。容
姿（変装版）は金髪ストレート、エヴァンジェリン・A・K・マク
ダウエル似　CV田村ゆかり

フリードリヒ4世　皇帝テレーゼの父　424　強いぞ陛下、名
君に成りつつあります。

CV阪脩

シュザンナ・フォン・ベーネミニュンデ侯爵夫人　フリードリヒ4世
寵姫でテレーゼの母親452

原作に比べて非常に穏やか、事件を起こす心配なし。CV藤田淑子

ケルトリング侯爵家のクラリッサ嬢　471　体力自慢、大ら
かブリキッテとは腐れ縁。

リリカルなのは、シャツハ・ヌエラ似　CV阪田佳代

エーレンベルク元帥子爵の曾孫のブリギッテ嬢　471　体力自
慢、負けず嫌い、

クラリッサとは腐れ縁。曾祖父と早朝ランニングしてます。
リリカルなのは、アリサ・バーニングス似 C V 釘宮理恵

メクレンブルク伯爵家のヴィクトーリア嬢 471~ 『』く普通の

貴族の娘、

オットリタイプ 一番体力がない。

リリカルなのは、ディード似ているが姿だけ。

C V 伊藤静

リヒテンラー＝侯爵家のエルフリー＝嬢 471~ 原作の刃物女
この世界ではオットリお嬢様 大叔父のリヒテンラー＝侯爵家の養
女に成っている。

C V 富沢美智恵

グリンメルスハウゼン子爵家のカロリー＝嬢 471~ 忍者みた
いな者 養女

喋り方は冷静沈着 ネギま！？の長瀬楓似 C V 白石涼子

ルードヴィヒ・フォン・ゴールデンバウム 皇太子 出番が殆ど無い
い影が薄い皇太子。

ヘーネ ベーネミュンデ侯爵邸のメイド

クラリッサ ベーネミュンデ侯爵邸のメイド

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト 462^ト フリード
リヒ4世寵姫

ラインハルト・フォン・ミューゼル ラインハルト・フォン・シ
エーンヴァルト

467^ト

本来の主人公。後にシェーンヴァルト男爵叙爵。
バトルジャンキー

ジークフリード・フォン・キルヒアイス

467^ト

叙爵後

エーリッヒ・フォン・キルヒアイス

ジークの父

元司法省官吏、現在憲兵隊嘱託

オットー・フォン・ブラウンシュヴァイク 公爵

アマーリエ・フォン・ブラウンシュヴァイク公爵夫人 フリードリ
ヒ4世第一皇女

エリザベート・フォン・ブラウンシュヴァイク オットーの娘

皇位継承権第3位

ヨアヒム・フォン・フレーゲル男爵 462^ト

熱砂の惑星で勉強中、結果的に島流し。

ウィルヘルム・フォン・リッテンハイム 侯爵

クリスティーネ・フォン・リッテンハイム侯爵夫人

フリードリ

ヒ4世第二皇女

ザビーネ・フォン・リッテンハイム

　　ウィルヘルムの娘　皇

位継承第4位

ベアトリクス・フォン・マリーンドルフ伯爵夫人　　ヒルダの母
さん

ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフ

468

マルグリート・フォン・ヴェストパーク男爵夫人

マグダレーナ・フォン・ヴェストパーク　460　メックと知
り会わなかつた。

480年男爵家相続

アルフレッド・フォン・ランズベルク伯爵　463

装甲擲弾兵副総監オフレッサーに弟子入り

ロベルト・フォン・ヒルデスハイム伯爵令息　462　アホ貴族
の代表　　陛下に怒られた。

継承権剥奪

イングヒルト・フォン・ヒルデスハイム伯爵令嬢　459　次期

ヒルデスハイム伯爵夫人

ヘルクスハイマー伯爵　有名な指向性ゼッフル粒子発生装置持ち逃
げ犯

マルガレータ・フォン・ヘルクスハイマー 474 ヘルクス
ハイマー伯爵令嬢

ヴィルフリーート・フォン・ベヒトルスハイム元帥 422
480年前後の宇宙艦隊司令長官 朝寝坊。

グレゴール・フォン・ミュッケンベルガー大将 グレゴール・フ
オン・エッシェンバッハ上級大將 429

後にエッシェンバッハ子爵叙爵。

447年18歳の時、母のヴィルフェルミナの姪と結婚。
480年前後の宇宙艦隊副司令長官

フリー・デグット・フォン・ミュッケンベルガー フリー・デグット・
フォン・エッシェンバッハ 463

士官学校生徒。 グレゴールの孫。

エーリッヒ・フォン・ミュッケンベルガー エーリヒ・フォン・エ
ッシェンバッハ 448

グレゴールの息子フリー・デグットの父。

14歳で現在の妻を孕ませてグレゴールにぶん殴られた。

士官学校中退。 現在ミュッケンベルガー本家領管理をしている。

テオドール・フォン・シュタインホフ元帥 410
統帥本部長 メタボ

ハーロルト・フォン・ヒーレンベルク元帥 408
軍務尚書 趣味早朝ランニング。曾孫が可愛くて写真を尚書室に飾つてある。

アルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将 480年前後の帝國軍士官学校校長
最近禿が進行中。胃炎進行中。

ウォルフガング・ミッターマイヤー 459
できちやつた婚 疾風

エヴァンゼリン・ミッターマイヤー 464
479年7月1日結婚

フェリックス・ミッターマイマー 479年12月29日
双子 疾風男の子

エリーゼ・ミッターマイマー 479年12月29日
双子 疾風女の子

ロベルト・ミッターマイマー 疾風父 造園技師

アデーレ・ミッターマイマー 疾風母

アルフレート・ミコールマイスター少佐 440
捕虜から帰ってきたエヴァンゼリンの父

現在加療中。 看護婦27歳とラブラブ中。

オスカー・フォン・ロイエンタール中尉 458- 言わざと知
れた誑し

ロリエンタ

ール事件当事者

マールバッハ伯レオンハルト ロイエンタールの伯父
ロイエンタールに自分の娘を嫁がせようと虎視眈々と狙っている。
ロイにとつては疫病神だが基本的には悪い人物ではない。

エルンスト・フォン・アイゼナッハ 457- 沈黙 今の
ところ殆ど出番なし

フリック・ヨーゼフ・ビッテンフェルト 458- 黒猪

リヒャルト・オイゲン 460- 後のビッテンフェル
ト副官

テレーゼファンクラブ会員ナンバー25

449

アウグスト・ザムエル・ワーレン 458- 愛妻家未だ鉄
腕じゃない

リーザ・ワーレン ワーレン夫人 478年7月入籍

レオポルト・ライブル大尉

458~ シミコレー・ション教官

クレメンス・ブレンターノ准将 30代男性

シミコレー・ションでテレーゼにボコボコにされた。

憲兵隊実働部長へ移動

ハインリヒ・フォン・ヴィッツレー・ベン少佐

20代男性

マルティナ・フォン・バウマイスター大尉

20代女性

ヴァーリア・ディーツゲン中尉

20代女性

4人ともテレーゼの侍従武官でグリンメルスハウゼンの部下。

リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン子爵大将 409~
言わずと知れたスパイマスター テレーゼの悪巧み仲間。別名ア
ウリス

憲兵総監に就任

ウルリッヒ・ケスラー少佐 452~ グリンメルスハウゼ
ンの部下

今のところ口りかは不明 テレーゼの悪巧み仲間

憲兵隊総監副官に就任

ユリアーネ・フェルゼンシュタイン イゼルローン要塞にあるバー
ファンタズィーのママ

グリンメルスハウゼンの部下

30代前半

レーナ バー ファンタズィーのホステルロイエンタール現

在の相手、

真相は不明。

コリアーネの部下 貴族の隠し子だと語つが

マンセル・フォン・グリンメルスハウゼン少将 リヒャルトの子
任務とは言え愛人200人の噂が立つ カロリー・ネの養父

デリンガー軍曹

箱に入つてケスラーの身代わりをした

ランセル准尉

箱を担いだ 20代の綺麗な女性です

メイドのハンナ
ンの工作員

アンネローゼの所にいるグリンメルスハウゼ

幼年学校に弟が在籍しているらしい。

ユストゥス・エーベネ中将 秘密工場親玉

ハンス・ノイマイヤー中佐 コンピュータープログラムが
得意

グリュザンテーマ・グリュツィー二工造兵大佐

新造艦設計士

ウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツツ中将 429

ローエングラム駐留艦隊司令官 意外にずぼら、

単身赴任時は3日ほど同じパンツを履くことがあるらしい。
奥さんと娘が居る。

エーリッヒ・フォン・ハルテンブルク伯爵 447

ハルテンベルク伯爵令嬢エリザベート 459 マチアスの婚

約者

フォルゲン伯爵令息のカール・マチアス サイオキシン麻薬の元
売り

フランツ・オットー・レイトマイエル 画家 メックリンガ
ーの代わりにヴェストパー・レ男爵夫人のお気に入りに

ブルーノ・フォン・シルヴァーベルヒ 内務省建設局官吏 地方左
遷中

ブルーノ・フォン・コルプト子爵 466 原作ではミッター
マイヤーに射殺

アウグスト・フォン・シュターデン大佐 理屈倒れ、フレーゲルの
逆鱗にふれ熱砂の星へ左遷

フレーゲル追放後、憲兵隊経理部長に就任、陛下を敬愛する様にな
る。

プレスブルク大尉 ヴェルナー・フォン・ケーフェンヒラー大尉

エコニアから捕虜交換で返ってきた士官 騙されやすい。現在入院中
テレーゼと陛下の考え方で、ケーフェンヒラー男爵家の養子になつた。

宮中警備隊所属

リンデマン准将

元ローエングラム星系駐留艦隊司令官 頭

が固いので罷免

ボルヒヤルト少将

アルタイル星系警備艦隊司令官 普通の人

ヘルマン・フォン・リューネブルク 450 ジ 未登場

アルノルト・フォン・オフレッサー大将 439 ジ 装甲擲弾兵

副総監 原始人、石器時代の勇者

ヴァーリア・フォン・オフレッサー 450 ジ けいおんのムギ似

沢庵眉毛 力持ち、握力50kg

ズザンナ・フォン・オフレッサー 466年7月29日 ジ 母親

似 沢庵眉毛 力持ち 貧乳

エアハルト・フォン・オフレッサー 477 ジ 父親似

バルムンド・バウムガルテン 424 ジ 15歳より35年間装甲擲弾兵を勤め上げ、退役後オフレッサー家の執事に。若き日の才フレッサーを教えた教官。現在ギックリ腰気味。元中佐

アーリア・バウムガルテン 440 ジ バルムンドの妻、元々ヴァーリアの家から来たメイド

現在メイド長。 468年にバルムンドと結婚。

ライムバッハー上級大将

430 ジ

装甲擲弾兵総監

エルネスト・フォン・モルト中将

装甲擲弾兵総監部査閲官

憲兵隊副総監へ移動

ワルター・フォン・ラフト大佐

装甲擲弾兵

武装憲兵隊部隊長へ移動

オットー・パウマン大佐

装甲擲弾兵 第12装甲擲

弾兵師団所属

武装憲兵隊部隊長へ移動

レムラー大尉

装甲擲弾兵

クリストフ・フォン・シュタイエルマルク男爵中将
第一次テアマト会戦で活躍したハウザー・フォン・シュタイエルマ

ルク中将 398～？の孫

祖父と同じで少壯の戦術家

クリスト大將

イゼルローン要塞指揮官

ヴァルテンベルク大將

イゼルローン要塞駐留艦隊指揮官

エルнст・シュムーデ少將

シュタイエルマルク艦隊參謀長

ミヒヤイル・ジギスマント・フォン・カイザーリング少將 後の

アルレスハイムの当事者

リヒャルト・ペーペン准將

カイザーリング艦隊參謀長

テーグリヒスベック大將

イゼルローン要塞司令官

プラテンシュレーガー大將

イゼルローン要塞駐留艦隊司

令官

クラウス・フォン・リヒテンラーデ侯爵 帝国宰相代理 国務尚書

シューレンブルク伯 帝国フェザーン駐留弁務官

エルネスト・メックリンガー少佐 454 男爵夫人フラグが折れて未だ有名じゃない。

レオポルド・フォン・ケッセリング中将 フリードリヒ4世の主席侍従武官

シェーンショテット准将 フリードリヒ4世の次席武官

グラウフス中将 エッシュエンバッハ艦隊参謀長 後の宇宙艦隊総参謀長

ミニヤエル・フォン・ノイケルン 宮内尚書 エヴァちゃん

事件で陛下に怒られる

宮内省の下級官吏 エヴァちゃん事件の元 マイナス30度の世界へ左遷

ビュルクナー少佐 イゼルローン要塞駐留艦隊の航海参謀

レギナルト・フォン・ケルトリング侯爵中将 434

クラリッサの父

ケルトリング侯爵家当主 グレゴール・フォン・エッシュエンバッハのはどこ

カール・ハインツ・ケルトリング ?~433の長男

宇宙艦

隊司令官

クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー 男爵中将 408-
原作なら480年1月1日急性心筋梗塞で死亡するが、
この病気自体早期発見早期治療すれば、

大丈夫な為生存中、現在は入院中治療中。

ローエングラム星系駐留軍統帥部第7課課長の肩書きを持つ。
その後宥めて、憲兵隊査閲官へ就任

ヨアヒム・キューバウアー 准将 統帥本部情報部所属
捕虜交換時スパイを送り込もうしていたが中止させられた。

クリストフ・ドゥンケル中佐

テレーゼの御召艦ラブンツェル艦長

446-

ハンス・エドアルド・ベルゲングリューン少佐

テレーゼの御召艦ラブンツェル運用長

452-

フォルカー・アクセル・フォン・ビューロー少佐

テレーゼの御召艦ラブンツェル副長

452-

ホルスト・ジンツァー少佐

テレーゼの御召艦ラブンツェル防衛指揮官

452-

アデナウアー少佐 男爵家当主 元商船の船長

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン?艦長

テレーゼの御召艦ラブンツェル補給長

ハルトマン・ベルトラム大尉

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン?副長

イゼルローン艦隊所屬新造駆逐艦カツツェ？へ異動

ヨーンゾン軍医中尉 大尉

イゼルローン艦隊所屬駆逐艦ハーメルン？軍医
テレーゼの御召艦ラブンツェル所屬

シャミツソ一中尉

イゼルローン艦隊所屬駆逐艦ハーメルン？砲術長
イゼルローン艦隊所屬新造駆逐艦カツツェ？へ異動

デューリング中尉

イゼルローン艦隊所屬駆逐艦ハーメルン？水雷長
イゼルローン艦隊所屬新造駆逐艦カツツェ？へ異動

エメリッヒ少尉

イゼルローン艦隊所屬駆逐艦ハーメルン？通信主任
テレーゼの御召艦ラブンツェル所屬

フレーベル少尉

イゼルローン艦隊所屬駆逐艦ハーメルン？通信主任
イゼルローン艦隊所屬新造駆逐艦カツツェ？へ異動

グナイト少尉

イゼルローン艦隊所屬駆逐艦ハーメルン？索敵主任
テレーゼの御召艦ラブンツェル所屬

インマーマン工兵中尉 少佐

イゼルローン艦隊所屬駆逐艦ハーメルン？機関長
テレーゼの御召艦ラブンツェル機関長

アラヌス・ザイデル兵長 伍長

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？機関部員
テレーゼの御召艦ラップンツェル機関部員

ロルフ・ザイデル 463

アラヌス・ザイデル兵長の弟現在16歳

シュミット一等兵 一等兵

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？機関部員
新人の機関部員

テレーゼの御召艦ラップンツェル機関部員

ヴィント一等兵 上等兵

イゼルローン艦隊所属駆逐艦ハーメルン？機関部員
テレーゼの御召艦ラップンツェル機関部員

ヘルマン・メルダース少佐

ケンプの代わりの飛行長、 やる気満々。 忠誠心大。
捕虜交換で帰ってきたワルキューレパイロット、 現在再訓練中
片眼が不自由 ケンプと因縁有り。

カール・グスタフ・ケンプ少佐 453

撃墜王 ラブンツェル航空参謀をお願いしたいが断る。
3人と非常に仲が悪くなつた。

ダンネマン中佐 戦艦クロッセン艦長

美人の娘がいるがその娘がロイエンタールに弄ばれた。
ベルゲングリューンの元上司

ハウプト中将

軍務省人事局長

シュミットバウアー 造船中将 皇帝陛下直属工廠長
技術才タク

タウベルト 造船大佐 ラブンツェル 造船主任
落ち着いた紳士

エルнст・フォン・バウマン少将 軍務省人事局人事部長
補佐

隻眼の少将、 グリンメルスハウゼンを爺さんという。

トーマ・ネルリンガー 中尉 バウマン少将の副官
苦労をしており胃が悪い。

クルマン 費長 バウマン少将の部下

シュミット 費長 バウマン少将の部下

コルニアス・ルツ大尉 456 ツ 巡航艦ゲヴィッター 副長

エルラッハ 中佐 巡航艦ゲヴィッター 艦長

ジークベルト・ザイドリツ ツ 士官学校4年 460

ベルンハルト・フォン・シュナイダー 士官学校4年 460

ギュンター・キスリング 士官学校3年 461

アントン・フェルナー 士官学校3年 461

ナイトハルト・ミュラー 士官学校3年 461

カール・エドワルド・バイエルライン 士官学校1年 463

オーディン帝国大学教授、アドルフ・フォン・ゼーフェルト博士

ライナー・グルック 内務省官吏

アリーセ フレークのメイド 肉体関係有り
フレーゲル家閉門後は実家に帰る。

典礼尚書のアイゼンフートの曾孫コンラート 462
熱砂の惑星で勉強中、結果的に島流し。

憲兵副総監クラーマーの息子グスタフ 462

ヴィクトール・フォン・コルプト 462
チクリ犯としてフレーゲル達に怨まれるが、誤解

シェッサラー子爵の息子フィリップ 462
熱砂の惑星で勉強中、結果的に島流し。

ヴェルナー・フォン・シャイド男爵 462
熱砂の惑星で勉強中、結果的に島流し。

ヘルムート・フォン・ノルディン ノルディン少将の弟 462
チクリ犯としてフレーゲル達に怨まれるが、誤解

ヴァーゲンザイル 462

ゾンバルト 462

アーニヤ ヒルデスハイム伯爵のメイド
ロベルト島流し後、屋敷に戻る。

シャーフェン少尉 オフレッサー邸警護指揮官

ランド軍曹 オフレッサー邸警護兵

レオポルド・シューマッハ少佐 452

站班長

憲兵隊兵

同盟少ないです。

宇宙暦789年度人名辞典同盟簡易版

同盟軍版です

サダ中将

第4艦隊司令官

シンクレア中将

第7艦隊司令官

シドニー・シトレ中将

第8艦隊司令官

ラザール・ロボス中将

第12艦隊司令官

クラドック少将 ↗787

第4艦隊副司令官

ルローン戦で戦死

第四次イゼ

パストーレ准将

第4艦隊分艦隊司令官

ラファエル・ラ・フォンテーヌ フェザーンにある自由惑星同盟高等弁務官

良識派 引退

チャン・ヨーステン フェザーンにある自由惑星同盟高等弁務官

汚職まみれ 新任

ディオニシオ・エンリケス

自由惑星同盟最高評議会議長

ヤン・ウェンリー少佐
の英雄になるが、

原作主人公の一人 エルファシリ
宣伝効果で今はペテン師扱い。

現在第8艦隊作戦参謀

ヨブ・トリューニヒト

新進気鋭の政治屋 扇動政治家

ジェームズ・ロックウェル少将

パー・ヴェル・コヴァリスキー大佐 ジャムシード星系同盟軍補給
敵司令官

ワイン事件の口封じに事故死
に見せかけ謀殺

アレクサンドル・ビュコック准将 マーロヴィア星系方面警備隊
司令官

バーナビー・コステア大佐 元エコニア捕虜収容所所長 公金
横領後家族共々

フェザーンへ逃亡

ジェームズ・ジエニングス中佐

エコニア捕虜収容所所長

ポートランド大尉

公金横領後家族共々

フェザーンへ逃亡

フヨードル・パトリチエフ大尉 エコニア捕虜収容所参事官 なる
ほどおじさん

バーリング中尉
エコニア捕虜収容所經理係
元ビュコツクの部下

マシュー・ソン准将
エコニアのあるタナトス管区司令官

ムライ中佐
タナトス管区参事官

ヴィットリオ・エマニエール
同盟軍軍人捕虜収容所での地獄の
日々を書き綴る

チャールズ・ブロンズ少将
同盟軍情報部所属

サミュエル・シャントリイユ中将 同盟軍情報部長、

オスマン大佐
統合作戦本部記録統計室 室長

ティボルド・フランクリン 国防委員長

ミハイル・ブルドウコフスキイ大将 統合作戦本部次長

アーサー・リンチ少将 元エル・ファシル警備艦隊司令官
帝国の捕虜と成るが宣伝効果で眞のエル・ファシルの英雄の渾名
が付く

現在収容所收監中 欠席状態であるが 大将へ昇進 同盟軍最高
幕僚会議議員就任

ぐだらなー小ネタ集（前書き）

ほととじゆぐだらなーです。

ぐだらない小ネタ集

ストレス解消とかの、あくまでパロディです、声優ネタとかです。

その1 ガンダム43話 光る宇宙

イゼルローン要塞にて。

「ラインハルト閣下が脱出されるのを聞いて支援に向かおうとしましたが残念です。

上級大将なら・・・」

「安心しろ閣下は私が守つて見せよつ」
「噂の白毛はいざこませんな」

「此処も大部空気が薄くなつてきた、フィーラは脱出しつ」

「兄さんはどうするのです?」

「ローエングラム伯はやはり許せぬと判つたそのケリはつけぬ」

「兄さん」

「お前も大人だらう、いい女になるのだな、アーベント君が呼んで
いる」

「アーベントが」

「ローエングラム閣下は?」

「出航されるところであります」

「上空レダ?接近中、急速発進」

「座れん者は床に伏せさせろ」

「10、9」

「キルヒアイス、私の手向けだ親友と仲良く暮らすが良い」「ケスラーか！」

その2 田村はかり

謎多きオーベルシュタインの恐怖、また1人取り込まれていく。
その野望は私が打ち切ります。

腹黒皇女、フランティアでれーザ、はじまります。

トルハンマーで全力全壊！！

その3 ガンダム第1話 ガンダム大地に立つ

「同盟の新型が、殺つちまえばこいつのもんだ！」

「よせ！ロイエンタール

「此は動きますね、この天才たる、アンドリュー・フォークに掛かれば新型機など簡単ですぞ」

「動いた！」

「何つて奴だ、ビームを全く受け付けません！」
「離れるロイエンタール！」

「嫌末だ旨くづ」けんようです「

「へへおびえて嫌がるぜ」

「うわ――」

一口イエンタール！」

「武器はないのか？」

「ロイエンタイル後退できるか？」

「補助動力が仕えます、行きます」

「うわあ……」

「認めたくないモノだな、若さ故の過ちと言つモノを」

その4 OVA45話 同盟軍の現状のナレーションより

士官学校校長フライエンフェルフ中将是、この数年来のストレスで頭髪の大半を喪失。

部だけと成っていた。

前頭部は、ストレスで抜け始めた後は、かつての教え子だった、アイゼナツハから貰った毛生え薬が活躍していた。

廃棄寸前の在庫品から、

テストも終わっていない未承認薬までを書き集めて。

その数だけは200本に達した、
此を2分し右頭部、左頭部に振り分けた。

別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 前編（前書き）

本編と取りあえずは、関係ない番外編です。

別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 前編

帝国暦488年10月10日

負け続けで遂にガイエスブルグ要塞前面まで討伐軍に侵攻され、ヴェスター・ランドへの核攻撃で、リップシュタット貴族連合が内部瓦解しつつあった、

ガイエスブルグ要塞内で叛乱が発生した。

叛乱の首謀者はヘルマン・フォン・リューネブルク大将で討伐軍司令官シェーンヴァルト元帥に対する個人的な恨みで貴族連合側に参加していたはずであるが、

土壇場で裏切り要塞の主要各所を占領し、貴族の子女を人質にしたのである。

又ブラウンシュヴァイク公も隙を突かれて捕縛された。

その為、貴族連合艦隊司令官ゼークト大將は無謀な突撃を諦め始めた。

その頃、ヴェスター・ランド核攻撃を聞いたキルヒアイスは、ブリュンヒルトに向かい、ラインハルトと口論を行っていたが、ラインハルトは親友に対して暴言を吐き分かれてしまった。

此が終生の別れど成ることも知らずに。

いよいよ貴族連合にとどめを刺そうとしたとき。

【直ちに両軍戦闘を止めよと】通信が入った。

両軍を攻撃可能な中央点に進出してきたのは、

シユワルツ・ランツォンレイターを露払いにした、銀河帝国皇女艦隊総旗艦クリエムヒルトであった。

旗艦は両軍の戦火を收める様に止まつた。

そして、宇宙空間に3D映像でテレーゼの姿が映し出された。さらに、銀河帝国全土に流されたのである。

テレーゼが今回の内乱において、既にブラウンシュヴァイク公や主要貴族が捕縛されたことを伝えると。

貴族連合軍は士気が一気に低下していった。

また参加した者は罰するが、家族には累を及ぼさぬと云つ事も彼等に矛を收めさせる結果と成つた。

このまま戦つても滅亡有るのみと判つていたからである。

しかし面白くないのは、ラインハルトである。

散々苦労して、円形脱毛になつて此処まで来たのに、

皇女風情に手柄を横取りされるのである。

苛つくりラインハルトの後ろでは、オーベルシュタインがなにやら考え始めていた。

そういうしてこなつたに、ヴェスター・ランド核攻撃についての話が始まつた。

撃つたブラウンシュヴァイク公の罪もだが、

それを黙認し自分の権力掌握に使つたラインハルトの罪も声だかに責めたのである。

キルヒアイスもその証拠を見せられ、愕然としていた。ラインハルト様はお変わりに成られたと。

さらに幼年学校以来の不敬な言動や篡奪の意志をしめした映像が流

されである。

その映像で銀河帝国全土で動搖が起つていていた。

元々平民の間では焦土作戦などをして、評判の悪いラインハルトである。

さらに評判は地に落ちていった。

そして、ラインハルトの旗下艦隊でも動搖が起つていていた。

オーベルシュタインがラインハルトに囁く。

「閣下。このまま居ますと閣下まで肅正されます」

「その様な事」

「いいえ。あの女は本気です、あの目を見れば判ります」

「しかし」

「閣下このまま行けば、グリューネワルト伯爵夫人も害されます」

「馬鹿な姉上は関係無いではないか！」

「閣下が篡奪者として肅正されれば、間違えなく連座でグリューネワルト伯爵夫人も肅正されます」

「姉上」

「閣下、グリューネワルト伯爵夫人をお助けするには、あの女を殺すしか有りません」

「しかし、その様な卑怯なこと」

「閣下、あの女は卑怯にもグリューネワルト伯爵夫人を人質にするに違いありません、手をこまねいていては、手遅れになります」

「姉上、姉上、姉上」

総旗艦クリエムヒルトが前進していく。

テレーゼの演説は続く。

「ショーンヴァルト元帥の職を解き、収監する」

いよいよ最後である。

キルヒアイスもラインハルトより、アンネローゼの事を心配で胸が張り裂けそうであった。

「閣下！」

オーベルシュタインが決断を求める。

幽鬼のように立つラインハルト。

決定的な一言をオーベルシュタインが話す。

「御決断頂けないなら、

このまま行くと、グリューネワルト伯爵夫人は恐らく処刑されるでしょう」

自裁ではなく処刑の文字にラインハルトが反応する。

「全艦隊総旗艦クリエムヒルトを攻撃せよ！」

その言葉にほくそ笑むオーベルシュタイン。

各艦で混乱が生じるが、ラインハルト艦隊の内1万隻ほどが砲撃を行う。

いきなり砲撃に銀河帝国全土に驚愕が走る。

次の瞬間、総旗艦クリエムヒルトは爆炎の中にその姿を消し消滅した。

其処の集まつた各艦隊、兵達が呆然と始める。

中には泣き出す兵士も多数出ている。

又捕まつている貴族達から、殿下！という嗚咽が聞こえ始めた。

ゼークト大将も怒りを露わにしだした。

「あの金髪の小僧をハツ裂きにしてくれー！」

しかし一番激高するはずのケスラー、ミッターマイヤー、ビッテン
フェルトが涼しい顔をしている。

そして、大笑いを始めた。

「ハハハハハ

氣でも狂つたかと思う者が出了たが、

次の瞬間、テレーゼが再度現れたことで、疑問が解けていった。

テレーゼ自身ラインハルトよりオーベルシュタインを全く信じてい
なかつた為に、
クリエムヒルトを無人で進行させていたのである。
テレーゼは総旗艦ヴェルザンディに乗つていたのだ。

ラインハルトの叛意を確かめる為に敢えてそうしたのである。
ラインハルト艦隊は5個艦隊75000隻であるが、
益々混乱するラインハルト艦隊。

そのうち何割が叛乱に参加するか全く不明になつしまつた。

降伏勧告が出されると、次々に機関を停止して白旗を揚げていく各
艦。

アンネローゼの事で、ラインハルトが呆然としてまい、
このままではとオーベルシュタインが後退を命令する。

後退したラインハルト艦隊に対し、

シュワルツ・ランツェンレイターが突撃を開始する。

「進め進め！テレーゼ様を害するような輩は1人残らず俺が地獄へ
送つてやるー！」

シユワルツ・ランツォンレイターが凄まじい勢いでラインハルト艦隊を引き裂いていく。

続いてミッターマイヤー艦隊が左翼から圧力を掛け。ワーレンやルツツやロイエンターール艦隊が右翼から攻撃を仕掛け。なんと今まで戦っていた貴族連合軍まで参加許可を受けて、ラインハルト艦隊を攻撃する。

「戦艦ガルガ・ファルムル撃沈、レンネンカンプ提督戦死！」

ブリュンヒルトの艦橋は味方の損害がウナギ登りであると次々に報告が入ってくる。

ラインハルトが呆然と偉している中、

オーベルシュタインが、この役立たずがと思っていた。

このまま逃げるしかないと思ったその瞬間。

「後方より砲撃。グリルバルツァー分艦隊からです！」

味方の裏切りがでたのである。

次の瞬間、ブリュンヒルトの艦橋至近にレールガンが着弾。

ラインハルトを天井から落ちてきた鋭いセラミック片が貫いたのである。

オーベルシュタインも倒れてきた柱に下半身を押しつぶされ半死半生である。

ラインハルトが出血しながらつぶやく。

「夢は夢で終わるのか、俺の力はこの程度のモノだったのか、姉上、キルヒアイス」

オーベルシュタインが彼にしては異様な笑いをあげる。

「ハハハ、ラインハルト・フォン・シェーンヴァルト、卿は面白い

ように動いてくれた。

しかし私の見込み違いだつたようだな」
そう言ってオーベルシュタインは事切れた。

ラインハルトが最後の力で叫ぶ。

「俺は道化だつのか!、姉上——」

その瞬間ブリュンヒルトをケーニヒス・ティーゲルの主砲が貫きラ
インハルトごと原子の粒に成つていった。

別伝 キルヒアイスとマンネローザの最後 中編（前書き）

この方が書きやすくて、
塾長は考え中です。

別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 中編

帝国暦488年10月10日

ブリュンヒルトが宇宙の藻屑と消えたとき、バルバロッサ内では走馬燈のようにアンネローゼとラインハルトとの思い出がキルヒアイスの頭の中を駆け回っていた。

呆然と成ったキルヒアイスに代わり、

参謀長ブラウチッヒがエンジン停止を命令し全艦隊に降伏を命令した。

次々に降伏していく旧ラインハルト軍。

一刻も早く降伏しないと怒りまくつているショワルツ・ランツォンレイターに斃り殺されるからである。特にクリエムヒルトを砲撃した艦は付け狙われ殆どの艦が撃沈された。

降伏後各艦は監視下に置かれ順次オーティンへ回航することになった。

貴族連合と家族達とラインハルト軍の幹部達はガイエスブルグ要塞から、オーティンへ向かうように輸送艦に乗せられていく。しかし、ジークフリード・フォン・キルヒアイスだけは総旗艦、ヴェルザンデイに搭乗させられ帰国する。

当初は自決も考えたキルヒアイスであるが、アンネローゼ様の事を残しておけないと想いとどまり護送されいく。

航海中、ビックテンフェルトは大声でキルヒアイスとラインハルトを非難した。

ミッターマイヤーはラインハルトは幼年学校時からの因縁があったと独白した。

ロイエンタールは、夢破れたなど一言だけ話していった。

テレーゼ自身がやつてきたのは、オーティンへあと5日の距離を残した時であった。

「キルヒアイス、卿が居ながらショーンヴァルトの野心を抑えきれなかつたとは残念だ」

「貴方に何が判るのですが、恵まれた生まれの貴方に」「恵まれたか、フン。妾は3度も殺されかけて居るのじや、それで恵まれたと言えるか」

「3度も・・・」

「そうよ3度じや。グリューネワルト伯爵夫人は一度もないではないか」

「アンネローゼ様は囚われていた、それでも恵まれていたと言えるのですか」

「キルヒアイスよ考えてみよ。

後宮に上がらず、あのままおれば遠く無い未来にアンネローゼはさらに過酷な運命を迎えたであろう」

「そんなこと私が」

「どうにか出来る年齢であったか?

あるまえ、何れアンネローゼは弟と父親を喰わせる為に春を売ったであろう」

「アンネローゼ様がその様な事をするわけがない!」

「落ちぶれた帝国騎士の娘の末路は大概そうじや、

アンネローゼだけが特別ではあるまえ

「アンネローゼ様……」

売春宿にいるアンネローゼを想像したのであるうか、
キルヒアイスが涙顔になつてていく。

テレーゼは別にキルヒアイスを虚めに来たわけではない。

「キルヒアイスよ、アンネローゼの罪は弟が篡奪未遂と大逆未遂と
不敬罪と言う事じや」

「アンネローゼ様は関係有りません!」

「そつはいかんのじや、連座があるのでな。卿の両親も連座じや」

「そんなアンネローゼ様、父さん、母さん……」

「ただし言つておくぞ、卿が死んでも罪は変わらぬ。いや逆に残つ
た者が責任を更に追及されよう。

つまりグリューネワルト伯爵夫人が篡奪と大逆を唆したとな

「アンネローゼ様はそんな事はしない!」

「真実などは関係ないのじや、

卿が生きて法廷に立たなければグリューネワルト伯爵夫人が立つだ
けなのじや」

うなだれるキルヒアイス。

こうなれば生きて自分が罪を全て被り死罪と成つてもアンネローゼ
を守ろうと心に決めたのである。

「私が法廷で罪を認めればアンネローゼ様を助けて頂けるのですか
?」

「良からぬ、キルヒアイスが罪を認めればアンネローゼは助けて遣
わそう」

「約束です」

「判つた」

キルヒアイスは自らの命をアンネローゼに捧げるのである。

同じ頃ノイエ・サンスーシ、グリューネワルト伯爵邸ではアンネローゼに対し自害等をしないように監視がつき軟禁されていた。又キルヒアイスの両親も自宅に軟禁されていた。

帝国暦488年11月20日

総旗艦ヴェルザンディ以下艦隊がオーティンへ帰還した。そのままキルヒアイスは誰とも面会も許されずに、憲兵隊で取り調べを受けラインハルトとの共同謀議を認めた上で自分が主犯であるとアンネローゼを守る為に独白したのである。

弁護人無し反論無しの裁判で出た判決は、篡奪犯、大逆犯、不敬罪で死刑が宣告された。

キルヒアイスは淡々と判決を受け入れ、心中でアンネローゼ様は救われると安堵した。

そして父さんと母さんに迷惑をかけてしまった事を詫びていた。

帝国暦488年12月24日

キルヒアイスの銃殺は嫌みたらしく、
グリューネワルト伯爵邸の至近で行われる事になった。
アンネローゼは今も幽閉中である。

テレーゼも銃殺を見届けに来ていた。
キルヒアイスの両親も引つ立てられて來た。
キルヒアイスは涙ながらに両親に詫びた。

「父さん母さんゴメン」

それしか言えなかつた。

両親も判つたと言つしか無い。

まず両親が壁に立たされ、銃殺隊により銃殺された。

「父さんー母さんーーー！」

銃殺され崩れ落ちる両親。

それを見て泣くキルヒアイス。

テレーゼはつまらなそうに扇を弄つてゐる。

それを見てキルヒアイスは怒りを覚える。

その時である、後方のグリューネワルト伯爵邸から黒煙が上がり始めた。

騒ぎ出す、富中警備隊。

キルヒアイスもアンネローゼの事を考え蒼くなる。

1人テレーゼだけが冷静にその黒煙を見ていた。

暫くしてグリューネワルト伯爵邸から伯爵夫人を軟禁していた兵達が駆け寄ってきた。

テレーゼが誰何する。

「如何したのじゃ？」

「はつ、グリューネワルト伯爵夫人が全ての罪を認めて、
ご自害成されました、その際火災も発生し炎上中でござります」

自害。アンネローゼ様が自害・・・嘘だ・・・嘘だ・・・嘘だ！！！
キルヒアイスは胸が裂けるほど苦しみだす。
其処へテレーゼがどぎめを刺す。

「存外アンネローゼも弱い女よ。自害とはな、ほんに期待はずれじ
や」

「何だとー。」

キルヒアイスが怒りを上げる。

「どうせ謀反人として流刑、じゃ。それに、そちの居ない世界はたえ
られんそうじやな」

掴みかかろうとするが、駄目である。

それよりせめてアンネローゼ様を炎からお出ししようとした体が動いた。

銃殺する為に拘束が解かれていた為、燃える館へ走り出した。
逃げるぞーの声が走る。

銃殺隊が銃を構えて止まれと言つがそんな事は構わない。

あと少しでアンネローゼ様の元へいける。あと少し。あと少し。
しかし、無情にもあと少しでキルヒアイスの体をブラスターが貫いた。

キルヒアイスは薄れていく意識の中で10歳の時のあの幸せだった
日々を思い出しながら倒れていったのである。

別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 後編（前書き）

塾長より先にパラレルワールドの話の最終回をじゅします。

別伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後 後編

「アンネローゼ様！――！」

そう言いながら、キルヒアイスの意識は暗転していった。

光が見える、まぶしい光が。あれがヴァルハラなのだろうか？
はつと目を開けると、照明がまぶしく感じる。

おかしい、自分はアンネローゼ様の館の前で撃たれたはずだ。

助かつて病院へ連れて来られたのか？

いやそのまま銃殺だつたはずだし体の痛みもない。

だいちあれだけ派手に倒れたのに服は全く汚れていない、

アンネローゼ様はどうなったのだ。

そして此処は何処なんだ？

ベッドに寝ていたが起きて付近を見た！

アンネローゼ様！！

少し離れたベッドにアンネローゼ様が寝ている。

アンネローゼ様、アンネローゼ様、アンネローゼ様が直ぐ其処にいる！

キルヒアイスはアンネローゼの元へ走り行く。

アンネローゼはベッドに寝かされている。

「アンネローゼ様、アンネローゼ様」

胸元を見るとうっくくりとだが息をしているのがわかる。

アンネローゼ様が生きておられる！

「アンネローゼ様、アンネローゼ様」「
失礼かと思ったが体を揺する。

「ん・・」

アンネローゼ様が目を覚ましてくれた。

「アンネローゼ様

「ん・・ジーグ・・・」

「アンネローゼ様！――！」

アンネローゼが気がつきキルヒアイスを見つめる。

「ジーグ」

「アンネローゼ様」

「ジーグ此處は何処ですか？」

「アンネローゼ様、すみません私も判らないのです」

「私はジーグの死刑と弟の死を聞いてもう生きていても仕方がないと、
毒酒を呷ったのです、それなのに何故生きているのかが判りません」

「アンネローゼ様、私もです。アンネローゼ様の館が燃え始めたとき、
アンネローゼ様の元へ走る途中で銃弾に貫かれたのですがその痕も
ありません」

2人して不思議がる。
そして見つめ合つ。

その時である、部屋の扉が開き眩い光が差し込んできた。
扉があること自体を2人とも気がついていなかつた。

アンネローゼを庇うキルヒアイス。

「アンネローゼ様」

「ジーク」

輝く光の中から、眩い輝きの鎧を纏つた騎士が現れた。
騎士に対し警戒するキルヒアイス。

騎士が語る。

「アンネローゼ・フォン・グリューネワルト、
ジークフリート・フォン・キルヒアイス、
我は、アルヴィト、お前達をヴァルハラへ迎えに来た」

よく見ると女騎士であるが、ビキニアーマーを纏っている。

「ヴァルハラだと！そんな馬鹿な！」

「アルヴィト、全知を有するヴァルキリーなの？」

「小さき者よ、オーディンの元へ向かうのだ、我が案内いたす」

「私たちは死んだのですか？」

アンネローゼの方が年増なだけ冷静である。

「アンネローゼ様、その様な事を」

キルヒアイスは死に対して敏感になつてゐる。

「その通りだ。此処は生と死の狭間、お主たちは死を迎えヴァルハラへ向かうのだ」

「そんな事あるわけがない！」

キルヒアイスは現実から目を「反ら」そうとしていた。

「アルヴィトさん、ジークとヴァルハラでも一緒に居られるのですか？」

アンネローゼは既に現世よりヴァルハラでの事を考えていた。

「アンネローゼよ、キルヒアイスと共に暮らすことは可能だ」

「アンネローゼ様、共に暮らすとな」

「ジーク、そのままの意味ですよ、現世では共に暮らせませんでしたが、

ヴァルハラでは2人で暮らしましよう永遠に」

「アンネローゼ様、アンネローゼ様、アンネローゼ様」

泣き出すキルヒアイスを抱きしめるアンネローゼ。

「そろそろ良いか、時間だ」

「はい、さあジーク参りましょう

このゆう時女は強い。

「はい。アンネローゼ様」

アンネローゼに付いていくキルヒアイスはまるで犬である。

真っ白な廊下を歩くと突き当たりに重厚な扉が有り、その扉が音もなく開く。

アルヴィートが此処へ入れるよう示す。

「この扉から中へ入るよ」

怖々とアンネローゼとキルヒアイスは手をギュッと握り合つて部屋に入る。

部屋はまるで法廷のようであり、目の前の裁判長席に1人の女性が座っている。その姿は、全身を真っ黒なフードとマントを纏つた死神のようになっていた。

「お主等が罪人、アンネローゼ・フォン・グリューネワルトとジーグフリート・フォン・キルヒアイスじゃな」
罪人の声にキルヒアイスが顔色を変える。

「アンネローゼ様は罪人じゃない」

「フ、激高するでない、此処は生と死の狭間、妾はヘルじゃ」

「ヘルの言葉に、固まる二人」

オーディンにより、ヘルは、名譽ある戦死者を除く、たとえば疾病や老衰で死んだ者達や悪人の魂を送り込み、彼女に死者を支配する役目を与えたのだ。

つまり自分たちは悪人なのかと、そして騙されたと感じた。キルヒアイスは確かに自分は、ラインハルト様のヴェスター・ランドの虐殺を止められなかつた。

それだけでも悪人だ、しかしアンネローゼ様はそうじゃないと叫びたかつた。

アンネローゼは自分の罪深さをヒシヒシと感じており、ラインハルトの悪行を助長したのが自分であると考えてあり、自分たち姉弟に巻き込んでしまつた、ジーグとジーグの両親に対してもいくら謝つても過ぎないと考えていた。

シーンとする法廷。遂に審判がくだる。

「ジーグフリート・フォン・キルヒアイス。地獄」
キルヒアイスは審判を聞き、自分の事よりアンネローゼ様がヴァルハラへ向かえるようにと祈つていた。

アンネローゼはジークが地獄に墮ちるなら自分も一緒にについて行こうと心に決めたのだ。

「アンネローゼ・フォン・グリューネワルト。地獄^{ヘル}」

「そんな馬鹿な！アンネローゼ様が地獄へ墮ちるはず無い！！」「ジーク、良いのです、私がヴァルハラへ行くわけには行かないのです。

貴方が居ない世界などどうでも良いことなのです。一緒に地獄へ墮ちましょう」

「アンネローゼ様」

「ジーク」

抱き合う2人。

「フフフ、アーハハハ」

笑い出すヘル。

笑い声が気になる2人。

「良い姿を見せて貰つた。2人の愛情、しかと確かめさせて貰つたぞ」

次第に何処かで聞いた声だと考え始めた。

真面目顔のアルヴィートが苦笑を始める。

「殿下、そろそろ宜しいのではありませんか？」

「この鎧、凄く恥ずかしいです」

「ズザンナ、その姿凄く似合つてるんだけどね、
その姿流石凛々しいね、オフレッサー父親譲りだね。
その姿ネットに流せばファンが山盛りになるよ」

ヘルとアルヴィートの掛け合いを聞きながら、

キルヒアイスとアンネローゼは呆然としている。

「アンネローゼ、キルヒアイス、妻じや、テレーゼじや
フードとマントを脱いだ姿は間違えなく、
銀河帝国摄政宮テレーゼ皇女であつた。

絶句するアンネローゼとキルヒアイス。

「すまぬの、お主等の心意気を見たかったのでな、一だ西うつたの
じや」

「心意気?」

やはりアンネローゼが先に意識を現世へ呼び戻した。

「さうよ、本来であればシェーンヴェルトの罪科で4人共々死罪が
相当じや、

だがの、お主等4人は実質的には被害者でもある。
シェーンヴェルトとオーベルシュタインの陰謀の被害者とも言える
のだ」

キルヒアイスは4人と云つて言葉にすつかり両親のことを忘れていた
事を思い出した。

「父さんと母さんは?」

「無事じや、生きておる」

両親がアンネローゼ様と共に生きている事に喜び、騒された怒りも
どこかへ行つてしまつた。

「ジーク良かつた

「アンネローゼ様」

両親が無事と聞き安堵する2人。

「それにじや、アンネローゼを連れ去つたのは、コルヴィッシュじや

が、

その一端を作ったのは、父上でもある。
父上も死の寸前までアンネローゼに苦しみを抱えてしまったと悔や
んでおられた」

「陛下がその様なお言葉を」

アンネローゼが瞠目しながら涙ぐむ。

「そこで父上は何があつてもアンネローゼを助けよと仰つたのじゃ、
思えば今日有ることを予測していたのかもしけんな」

テレーゼがしみじみと話す。

実際はそう仕込んでいたからなのだが、

それを聞き、アンネローゼだけでなくキルヒアイスも驚愕し、
自分は何をしてきたのだろうと考へ始めていた。

アンネローゼとキルヒアイスが質問をする。

「私は毒酒を飲んだはずですが」

「私と両親もブラスターで撃たれたはずですが」

「アンネローゼのは睡眠薬じゃ、

キルヒアイスと両親は氣絶モードじゃ、
流石に誤魔化すのは大変じゃったぞ」

テレーゼは2人を見ながらニヤリとした。

「しかしながら、シェーンヴェルトだけは許せん!」

テレーゼが珍しく怒氣を露わにする。

「ラインハルト様はラインハルト様なりに平民の事を考へていまし
た」

キルヒアイスが反論する。

アンネローゼは気が気でない、此処でテレーゼの機嫌を損ねたら又死罪と言つ事もあると、

ジークが死ぬなんて嫌だと言つ感情が益々大きくなつていった。

「ジーク止めなさい、殿下に謝るのです」

「よい、アンネローゼ、妾も教えてやりたいのだ。

シェーンヴェルトとオーベルシコタインの起こした悪行をな

何があるのか、2人はラインハルトを思い出しながら話を聞くのである。

「シェーンヴェルトは焦土作戦を行つたが、妾は反対じやつたが、それは敵を倒す為と押し切られた、その為辺境では阿鼻叫喚が発生したが、叛徒共をアムリツツアで撃破するせい、辺境に何の処置もせずに追撃しかしなかつた。

輸送艦隊を送り物資の補給すらしなかつた。

戦果のみを求めて、辺境の臣民の事などじつでも良かつたと言つ事だ、

結局妾が、メルカツツを送り支援を行つたのじや」

キルヒアイスは思い当たり反論が出ない。

「次に、ブラウンシュヴァイク公の部下がシェーンヴェルトを襲つた事じや。

あれで内乱が起こつたが、本来で有ればあれは起こらない内乱だつたのじや」

「内乱が起らぬいとは?」

「実は、あの翌日に父上の遺言状を妾が黒真珠の間で発表することになつておつたのぢや」

「その様な事が」

「なんじやそちは知らなかつたのか」

「はい、何も聞いておりません」

考え始めるテレーゼ。

「やはりな。アンネローゼよ、キルヒアイスは、騙されていたようだな」

「いつたい誰に?」

「ラインハルト様か?」

「恐らくオーベルシュタインじやな」

「オーベルシュタイン」

「そうじや、妾はあの襲撃の翌日の遺言状発表に際して、帝国全土の貴族とその家族をノイエ・サンスーシへ呼び寄せているはずであつた。

そしてノイエ・サンスーシの周囲には、オフレツサー率いる装甲擲弾兵10万人が待機しているはずであつた。

そして当日、遺言状発表に事欠いて集まりし4000人を超える貴族を一網打尽で捕まえるはずであつた。その際家族諸共捕縛する予定じやつた

「その様な暴挙を行えば、殿下の名声にお傷が
アンネローゼが心配そうに聞いてくる。

「良いのじや、妾1人が悪行、未來永劫残るつとも、僅かの犠牲で数千万の内乱における犠牲者が救えるのじや。妾の名誉など塵芥よ」

アンネローゼがそれを聞いて涙ぐむ。

キルヒアイスも絶句する、この方は何という方なのだらう。

「だがな、それは前夜のシェーンヴェルト元帥府襲撃で潰え、そのまま内乱に突入してしまった。此ほどシェーンヴェルトとオーベルシュタインを怨んだことはないぞ」

「お待ち下さい、ラインハルト様は襲撃されたのですから、悪いのはブラウンシュヴァイク公の周辺の者でしき」

「キルヒアイス、やはりそちは知らなんだな。あの襲撃は、オーベルシュタインが行わせたのじやぞ」

「まさか」

「そのまさかよ、ブラウンシュヴァイクの家臣ハウプトマンがシュトライトとフェルナーを嗾けて襲撃をさせたのじや、しかしな奴はオーベルシュタインの犬ぞ」

衝撃の事実にキルヒアイスは愕然とする。

確かに、テレーゼの策を行えば、悪名は残るが門閥貴族を潰し改革が成功しただろう。

内乱に比べて遙かに少ない流血で。

それをオーベルシュタインが潰した。

ラインハルト様は何処までご承知なのだらうか、それが気になつた。

アンネローゼは、弟が恐ろしいことをしていたと益々嘆くのである。

弟の権力欲で数千万の人々が不幸に成ったのである。

此ほどアンネローゼの心を搖きむしる事は無いだらう、そして弟に対する愛情が薄れ、険悪感が沸き上がるのを感じ始めていた。

「そして、ヴェスター・ランド核攻撃の事じや、

撃つたブラウンシュヴァイク公も悪いが、

敢えて傍観し権力掌握に使つたシーリング・ヴェルトも悪いのじや」

「しかし殿下もそれを阻止できなかつのではありますんか？」

些か屁理屈を言つてしまつ、キルヒアイス。

まだラインハルトを信じたい気持ちがあるので。

「そうよの、妾もガイエスブルグに間諜を仕込んでおつて、ブラウンシュヴァイクの核攻撃の情報は得ていた

「では知つていながら敢えて無視を為さつたのですか？」
キルヒアイスが厳しく問つ。

「勘違いするな、その様な事するわけが無からう。

妾は情報を受けて直ぐに、ミュラーを遣わしたのじや。

そしてミュラーはヴェスター・ランドへ到着し待機したのじや

「しかしそれで何故核攻撃が起こつたのです？」

「それよ、ミュラーは見事にブラウンシュヴァイクの攻撃を防いだのじや

「攻撃を防いでいるのに、何故核攻撃があるのでですか？」

キルヒアイスは気がつかないらしい。

「妾はブラウンシュヴァイクの攻撃は防いだと申したのじゃ」

「それは」

混乱するキルヒアイス、ブラウンシュヴァイクの攻撃は防いだと言う事は、

他に攻撃した者が居るといつことなのか？

「そうよ、判つたかもつ一人の攻撃者はショーンヴェルトの配下じゃ！」

まさかと、いう顔をするキルヒアイス。

アンネローゼは最早そなのかと、あきらめ顔である。

「まさかラインハルト様がそんな事をするわけがない！」

「いやしたのじゃ。奴らは偵察艦だけでなく、巡航艦を後方から準備し、

ミコラーがブラウンシュヴァイクの攻撃を止めたとき、隙を突いて核攻撃を行つたのじゃ。あの映像は自作自演じゃ……！」

「そんな、そんな」

「証拠もある核攻撃を行つたのは、巡航艦アヴァロンじゃ」

「ミコラーがヴェスター・ランドを守る為に広域衛星で監視させていて偶然撮れた映像じゃ」

其処には偵察艦の影から核ミサイル発射する、アヴァロンの姿が映つており、

その核がヴェスター・ランドへ次々に着弾するさまが撮されていた。

映像を見せられた。キルヒアイスが力なくつぶやいた。

「ラインハルト様の艦隊の艦です」

どうしてラインハルト様は悪魔の所業をするようになったのか、俺は何を見てきたんだと、キルヒアイスは嗚咽を始めた。

それを優しく抱きしめるアンネローゼ。

「ジーク、私は、もうあの者を弟とは思いません！」

「アンネローゼ様・・・」

「ジーク、貴方もあんな男を様付けなど止めなさい！」

「私の大事な人はジークだけになってしましました」
涙ぐむアンネローゼはジークをじつと抱きしめる。

「2人とも、シェーンヴェルトが変わったのは、恐らくオーベルシユタインのせいぞ」
「オーベルシユタイン」

「そうじゃ、きやつが元帥府に入府して以来、
シェーンヴェルトの行動が臣民を思うモノから霸道へと変わつてい
つた。

シェーンヴェルトはオーベルシユタインの負の力に飲み込まれたの
じやろう」

「ラインハルトさ。あつ、ラインハルトが飲み込まれた」

「そうじゃ、オーベルシユタイン、

きやつは、ゴールデンバウム王朝五世紀の怨嗟や怨念が固まりし化
け物よ。

その化け物にシェーンヴェルトは飲み込まれたのじや、
シェーンヴェルト自身の野望の為に」

キルヒアイスは確かにオーベルシユタインが来てからのラインハル

トの変わり様を思い出していた。

アンネローゼも考えていたのである。

暫くして。

「所でお主等の処遇じゃが、謀反人ラインハルト・フォン・シェーンヴェルトの一族と共謀謀議者じやから、

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト伯爵夫人は毒酒を呷つて自害。

ジークフリート・フォン・キルヒアイス家族は銃殺刑。となつておる、つまり既にお主等は表向き死人なのだ」

うなだれる2人。

「しかし、父上のこともある。そしてキルヒアイスは心優しき人じや、

お主等に新たな姓と名前を授けよう、無論父と母にもじや。その代わり、余り顔をだせんから、ローランド・ラム領に住んでもらうぞよいな」

「しかし私たちは生きる資格が」

「アンネローゼ、安易に死を選ぶな。生き抜く」とこそ贖罪と思つのじや。

キルヒアイスと子を成し家族を増やしその地に繁栄を起こすのも贖罪ぞ」

「キスヒアイス、卿も同じじや、アンネローゼと共に子を成し、育て慈しみ繁栄をもたらすのじや」

「殿下」

「殿下」

アンネローゼとキルヒアイスは涙ぐみながら、崩れ落ちてテレーゼにお辞儀しまくる。
まるで土下座であった。

「此でよいのじゃ、グリューネワルト伯爵夫人は自害の上、館に火を放ち遺体は焼けてしまった。

キルヒアイス元中将は銃殺中に逃げ出し、
グリューネワルト伯爵邸に入り焼け死んで死体も焼けてしまった。
これが公式記録じや、のうズザンナ」

「御意」

「そりばじや、2度と逢つ」とは無かる。召も無き者達よ」
颯爽と退室していくテレーゼを見て、新たな名前を貰つた2人はすつとお辞儀をし続けたのであった。

帝国暦503年9月20日

ローベンクラム星系ローベンクラム本星トレラント島

雄大な大地一面が黄金色に輝いている。

今年も稻は豊作だ。

其処で仕事をしている、ノッポの赤毛の男が麦わら帽子を被り直しながら汗拭く。

「父さん、母さんがお昼だつて」

「ああ、ジークフリート、今行くよー」

手を止め、父親似で赤毛の13歳の子供を肩車しながら、彼は家族の待つ家へ帰っていく。

家では金髪の優しい笑みの女性が、

母親似で金髪の11歳の娘と共に毎日飯の支度をしている。

「アンネローゼ、お爺ちゃんとお婆ちゃんを呼んできてくれる」「はーい母さん」

家族の団らんである。

祖父と祖母、息子夫婦に、長男、長女、そして次男、金髪の3歳児は祖母がスプーンから食事をあげている。

「ラインハルト、好き嫌いしちゃダメよ」

ジークフリートが父に話しかけてくる。

「父さん、女帝陛下は凄いね、叛徒の首都を陥落させて降伏させたんだって。

残念だな僕も軍人になりたかったのに、これじゃ軍人に成ることが出来ないや」

「そうだな、テレーゼ様は凄いお方だったな」

「父さん女帝陛下を知ってるの」

「昔、間接的にお仕えしていた」とがあつたのを、

「へー凄いね、そのお話してよ」

「ああ。教えよつ、嘗て銀河を又に駆けた英雄達の物語を・・・」

・

銀河英雄伝説

Fin

没伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後（前書き）

どうしようもない。ねたです。・夜勤先で書いてます。
休み時間が終了。

本当の後編は明日以降に。

没伝 キルヒアイスとアンネローゼの最後

「アンネローゼ様！――」

そう言いながら、キルヒアイスの意識は暗転していった。

光が見える、まぶしい光が。あれがヴァルハラなのだろうか？
はつと気がつくと草原に倒れている自分に気がついた。
おかしい、自分はアンネローゼ様の館の前で撃たれたはずだ。

そう思い体を見るが、打たれた跡が何処にも見あたらない。
アンネローゼ様はどうなったのだ。
そして自分は何故此所にいるのだ。

キヨロキヨロしていると、

自分の方へ歩いてくる人物が見えた。

よく見ると甲冑に身を包んだ女性のようだ。

その豊かな胸をビキニアーマーで覆っているのが見て取れた。
自分に近づいてくるその女に対して警戒感を持つが、
ブラスターも何もない状態では格闘でしか戦えないのだ。

相手の出方を見るしかないとキルヒアイスは思うのである。
女がキルヒアイスの前に立ち問う。

「そちが、ジークフリード・フォン・キルヒアイスか？」

キルヒアイスも相手に殺氣が無い事を感じて、取りあえずは答える。

「そうだそれがなにか？」

「我はヴァルキリーゲンドウルだ、そちをオーディンの元へ案内しにきた」

「オーディンだって、そんな馬鹿な！」

「本当じゃ、そちの死はイレギュラーなのじゃ、
ラーズグリーズが誤ってそちの生の糸を切つてしまつたのでな、
オーディンがそちを転生させてやる」と云つて訳じや」

「転生だって、そんな夢のような事を…」

「事実は事実じゃ、アンネローゼも転生できるやうじや
「アンネローゼ様が、それは本当か！」

「これ声が大きい、これじゃから最近の若い者はいかんのだ、
アンネローゼも誤つて死んだのでな、
オーディンが「やばつ」という事で転生をさせる事にしたのじゃ」

些かいい加減な回答にあきれるキルヒアイスだが、
アンネローゼ様が転生でも生き返られる事に喜びいっぱいである。
ラインハルトの事はすっかり忘れていた。

「そこで、特例措置としてそちら2人を同じ場所に転生させる事になつた」

「アンネローゼ様と同じ場所ですか」

更に喜ぶキルヒアイス。

「場所は漫画の世界でリリカルなのはの世界です、其所で夫婦として転生するのです」

夫婦の言葉に嬉しがる。

「では、オーディンの元へ行くぞ」

別伝 ヒルダの殺人クッキング（前書き）

今回のヒルダクッキング＝シャマルクッキングで思いついた、千文字ほどの短編。

別伝 ヒルダの殺人クッキング

新帝国暦1年7月6日

オーディン キュンメル男爵邸

この日皇帝に即位したラインハルトは、即位後初の臨御先、キュンメル男爵邸へ向かつた。

キュンメル男爵がラインハルト一行をもてなす為に中庭へ誘つ。料理はヒルダが腕によりをかけた料理で有つた。

「良い料理ですね、ヒルダ姉さん」

「ええ・・・・・」

「」の料理は、陛下の為にヒルダ姉さんが腕によりをかけた料理です。

でもこの事は知らないでしょ？・・・・・この料理はBCJ兵器並の破壊力があることを。

そして、陛下をヴァルハラへお迎えしようとしているんですよ

そして全ての風景が一瞬のうちに漂白されたのだ。危険きわまりないヒルダの料理の名前を耳にして、キスリング准将のトバーズ色の瞳が緊張をはらんだ。

「ハインリッヒ、あなたは・・・・・」

「ヒルダ姉さん、あなたを恥かしめるつもりは本意ではなかつた。出来れば料理を作つて欲しくはなかつた。でも今更陛下にあなたの料理を食べさせない訳にはいかないからね。伯父上は悲しむだろうけど仕方ない」

「陛下」感想はいかがですか？」

「此処で料理の為に殺されるなら、予の命數もそれまでだ。惜しむべき何物もない」

「けどヒルダ姉さんの為に陛下に食べさせる訳には行かないのですよ」

ハインリッヒはそう言いつながら、自ら料理を食べようとする。

「ハインリッヒ、お願い未だ間に合ひつわ、料理を食べるのは止めて」
「・・・ああ、ヒルダ姉さん、あなたでも困ることはあるんですね。僕の見るあなたはいつも颯爽としていて、眩しいぐらい生氣に溢れていたのに」

「静かに後数分だ。ほんの数分だけ、僕の手に料理を握らせておいてくれ」

遂にハインリッヒはヒルダ料理を食べてしまった。

そして倒れるハインリッヒ。

駆けつけるヒルダ。

「ハインリッヒ、あなたは馬鹿よ・・・」

「僕は何かをして死にたかった。どんな悪いことでも、馬鹿なことでもいい。何かして死にたかった・・・ただそれだけなんだ」

ヒルダがハインリッヒを抱きしめながら、ハインリッヒがつぶやく。
「・・・・キュンメル男爵家は、僕の代で終わる。僕の病身からではなく、僕の愚かさによつてだ。僕の病気はすぐに忘れられても、ヒルダ姉さんの料理を食べた愚かさは幾人かが記憶してくれているだろう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4827y/>

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けませんシリーズの外伝や各種設定

2012年1月14日20時53分発行